

九州天皇家論 章 大八州

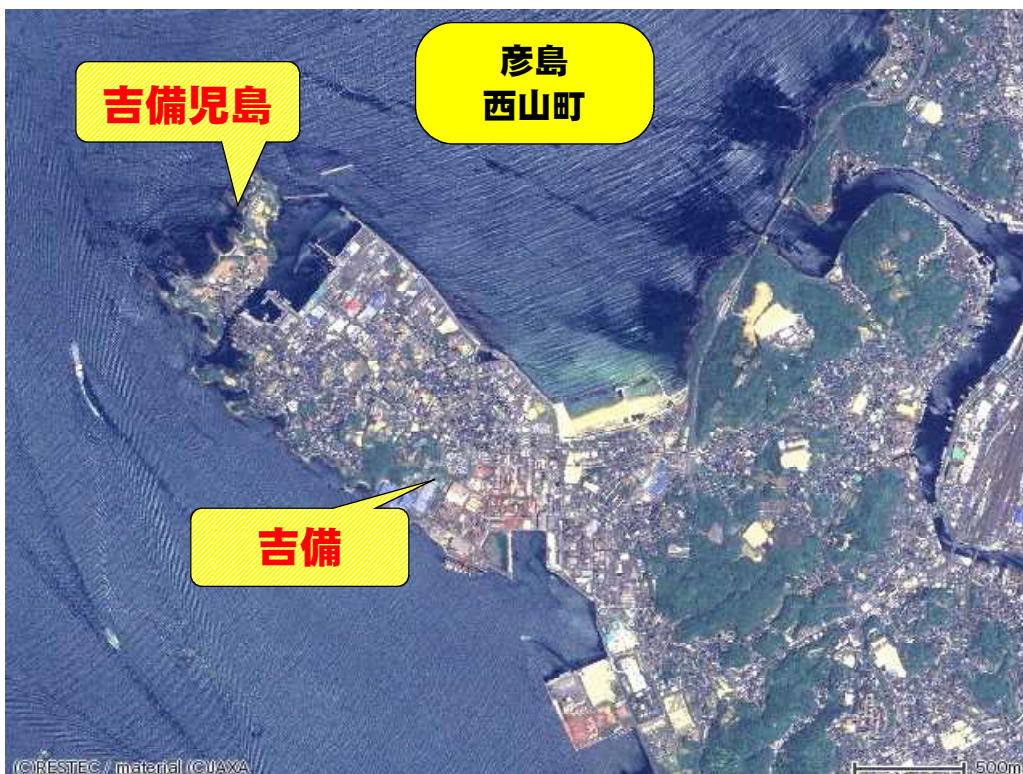
九州天 (あま) 王朝誕生

吉備児嶋・小豆嶋・大嶋 女嶋・知訶嶋・両児嶋

然ありて後、還り座す時、吉備児島を生みき。亦の名は建日方別と謂ふ。次に小豆島を生みき。亦の名は大野手比売と謂ふ。次に大島を生みき。亦の名は大多麻と謂ふ。次に女島を生みき。亦の名は天一根と謂ふ。次に知訶島を生みき。亦の名は天之忍男と謂ふ。次に両児島を生みき。亦の名は天両屋と謂ふ。
(古事記・大八嶋の生成)

これらの島は、「還り座す時」、つまり帰る途中に建国した。どこから帰る時か。もちろん、「大倭豊秋津島」に國を打ち立てた後である。西から東に進み、そして最後の「秋津島」から関門海峡を西に戻ってきたのである。これらの島は関門海峡周辺の島々である。その順番は南から北である。「伊豫二名島」に近い方から支配下においた。

吉備児島



先ず、最初が「吉備児島」である。別名は「建日方別」。「吉備」は記紀によく登場する。「吉備岡山」と言われるように、「吉備」は「岡山」の代名詞となっているが、国生みの「吉備児島」は岡山吉備ではない。「吉備」と「吉備児島」は別である。「吉備」はもともと植物の「黍(キビ)」の穂に似た形をした地勢をしていたからこの地名がついたのであろう。「児島」はその名の通り小さな嶋であろう。

この嶋の特定は単独でできるわけではないが、次の「小豆島」との関連で凡その場所を決めることができる。「吉備児嶋」は「彦島・竹の子島」で、「吉備」は「彦島・西山町」である。

小豆島

日本書紀・応神紀に「小豆島」が歌われている。

22年の春3月5日、天皇、難波に幸して、大隅宮に居します。…爰(ここ)に天皇、兄媛が温情之情篤きことを愛でて、則ち謂りて曰はく、「爾二親を視ずして、既に多に年を経たり。還りて定省(とぶら)はむと欲(おも)ふこと理灼然(ことわりいやちこ)なり」とのたまふ。則ち聽(ゆる)したまふ。仍(よ)りて淡路の御原の海八十人を喚して水手(かこ)として、吉備に送す。

夏四月に、兄媛、大津より發船して往りぬ。天皇、高臺(たかどの)に居しまして、兄媛が船を望(みそこな)はして、歌(うた)よみして曰はく、

淡路島 いや 二並び 小豆島 いや 二並び 寄ろしき嶋嶋 誰かた去れ放ちし
吉備なる妹を 相見つるもの

秋9月6日、天皇淡路島に狩したまふ。是の嶋は海に横(よこた)はりて、難波の西に在り。峯巖(たけいはほ)紛(まよ)ひ錯(まじ)りて、陸(おか)谷相續(つ)けり。芳草蒼(しげ)く蔚(も)くして、長瀾(たかきなみ)潺(そそ)ぎ湲(なが)る。亦麋鹿(おほしか)・鴨・雁、多に其の嶋に在り。故、乗輿、屢(しばしば)遊びたまふ。天皇、便ち淡路より転りて、吉備に幸して、小豆島に遊びたまふ。

(日本書紀・応神紀)

応神天皇の歌では「小豆島」は「二並び小豆島」と歌われている。「二並び」というのであるから、二つの島が並んでいる。「小豆」とは「あずき」のことである。「大豆(だいず)」ではない。「六連島」はまさに「あずき」の姿をしている。一方、現在の香川県小豆島は「あずき」というより「大豆」の形に似ている。古代「小豆島」はその名の通り「小豆(あずき)」の形をしている。「國生み」の「小豆島」とは「六連島」である。まさしく、「二並び 小豆島」である。

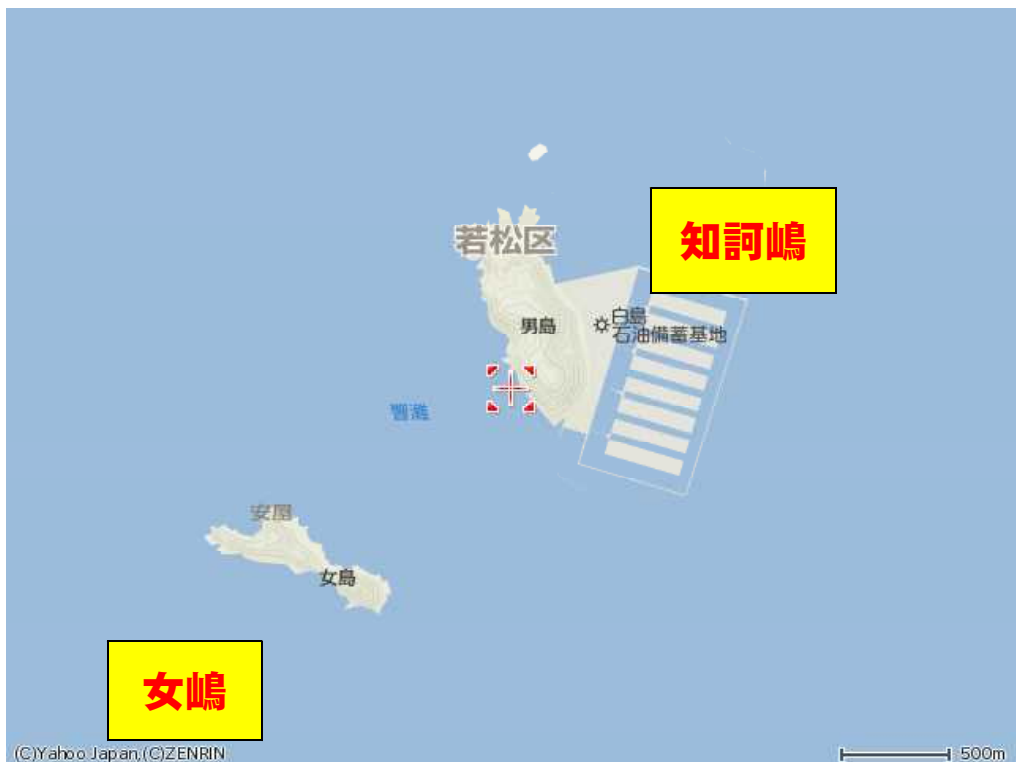


両児島



「両児島」はその名前が「ふたご」である。この名も島の形からきたものであろう。最後に生まれた島であるから、一番北にある島であろう。それは「蓋井島」である。この島の形を見てください。左右対称である。双子の名にふさわしい。

知訶島・女島



「大島」「女島」はその間の島である。南から順に行くと「大島」は「藍島」、「女島」はそのまま「女島」、「知訶島」は「男島」である。

亦の名は「天之忍男」、「あまの國の輝く男」という別称であるから、「男島」がふさわしい。「女島」には「姫嶋」の名が残る。

大島



六島総図

